

ファーラービーにおける理想的国家論 : ウイグル哲学におけるギリシア哲学の受容

アブドゥラフマン, ムフタル
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1564196>

出版情報 : 哲学論文集. 50, pp.1-19, 2014-12-26. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

ファーラービーにおける理想的国家論

——ウイゲル哲学におけるギリシア哲学の受容——

ムフタル・アブドウラフマン

序

ファーラービーは、プラトンが『国家』や『法律』において理想的国家思想を主題とした以降、理想的国家思想の最も代表的な提唱者として、世界政治思想史において重要な位置を占めるべき思想家である。

ファーラービーの理想的国家思想を「プラトンの理想的国家思想の続き」あるいは「イスラミ的な条件づけのもとに変更されたバージョン」と言うのは不正である。これは「西洋中心説」派による、豊富で彩色な人類の文化の成功結晶を軽視し拒否するニヒリズム思想の表われである。ファーラービーは、中世における、最も代表的な人文主義的社会科学の思想家として、理想的人類社会についての最も優秀な著者である。本稿はウイゲル哲学におけるギリシア哲学の受容を主題としよう。

一　ギリシア哲学からファーラービーへ

理想的国家及び社会の諸問題について、ファーラービーとプラトンの見解の要点は、以下の五点にまとめられる。

ファーラービーは、現実の国家社会制度を批判しそれに代わって理想的国家社会を作るというプラトンの勇氣を受容する。しかし、プラトンが奴隸制的な民主国家制度に反対し独裁的な政治国家形態を提唱するのに対して、ファーラービーは中世封建社会におけるあらゆる不平等、圧迫、独裁制あるいは貴族封建制度に反対し、人道主義的な民主国家形態を強調した。

プラトンの賢明な哲人国王が奴隸制における貴族の「賢明」な代表であり、彼自身がこのような国王に最適な哲人であるのに対して、ファーラービーは、智慧と知識に優れた、人道主義的で有徳な力強い国家首領の必要性を説き、その行いが宇宙の法則と智慧の法則にふさわしくあり、その行いの結果が国家社会と人民の生活を文明的な輝かしい方向に導くべきであると強調しながら、あらゆる人間が智慧と知識において賢明な哲人国王になるための資格のあることを強調する。ファーラービー自身は生涯において非常に質素に生き、彼自身が首領になる意図はなかった。

ファーラービーの理想的国家思想は、プラトンの奴隸制における貴族独裁制国家思想から明らかに区別され、人民主義的な本質によってプラトンの見解と対立する。プラトンは、社会は永続的に奴隸社会として創造され、奴隸達や手工業の職人達などは権利を持たないことを述べる。彼の思想において、人間は誕生する前に絶対的な「理想的アイデアの諸概念の国」において魂は様々に位置づけられ、どのように努力しようともその位置づけからは超えられない¹⁾。それに対して、ファーラービーの思想において、人間は本質的に平等である。ファーラービーは、こうした点においてアリストテレスとともに、プラトンの「理想的アイデアの諸概念の国」に反対している²⁾。

プラトンは自らの理想的国家の典型としてエジプトにおける粗暴な独裁制やスパルタ的な軍事独裁が魅力的であると強調する。ファーラービーは正反対の思想を強調し、あらゆる人間が有機的な相互協力によって発展と幸福のために尽力する文明的理想社会を目指している。

ある著者達は、ファーラービーの理想的国家思想をアリストテレスの理想的国家思想の継続あるいはムスリム東洋において変更されたバージョン形態として一方的な見解を述べる。

注目に値するべきなのは、哲学全体において、特に自然哲学思想においてファーラービーはアリストテレスの継承者であることである。アリストテレスは、プラトンのように専ら著作を書くことで自らの理想的国家思想を解説するということはなかった。それにもかかわらず、彼は『大道徳学』や『ニコマコス倫理学』などの著作においてプラトンの「理想的国家」思想を批判し、自分の諸見解を語る。

ファーラービーは、アリストテレスのプラトン哲学批判、特に政治思想に対する批判を継承する。ファーラービーは、アリストテレスの「人間は政治的動物である」、国家の基盤は人間の共同体として生きることに対する自然的ないし必然的志向である、国家は自由人の共同体である、平等性は正義と法が一体化されるべきなどの諸見解を受け取った。しかし、アリストテレスによると、自由人や国民、そして国家や法は奴隷達を含まず、手工業者達もこの範囲の外に排除される。アリストテレスは奴隷制を、永続的で自然必然的に公正なものともみなす。アリストテレスは、ギリシア人はあらゆるところで奴隷になるべきではない、異国人は生まれながらの奴隷であるともみなす⁴。この考えによると、奴隷達には友愛と正義の必要がない。彼らはただ話ができる存在、生きている道具とみなされる。これに対してファーラービーは、自らの宇宙一元性、そして宇宙の有機体性の思想に基づいて、アリストテレスの奴隷思想の諸見解を拒否する。彼の考えによると、あらゆる民族は自然と智慧の視点から、理想社会の実現に向けて平等で公平である。

ファーラービーはアリストテレスの民主、正義、そして法律思想を変更しながら受容する。アリストテレスの考えによる

と、「民主制」は「中間階層」の奴隷主達の共和国である。アリストテレスはプラトンのスパルタ的な粗暴な奴隷主達の財団の人民に対しても、民主制に対して對抗する貴族達の統治形態にも抵抗しながら、一方で、民主制に対しても不満を持つ。⁵ ファーラービーはこれよりずっと民主的で進歩的である。実際に彼は、あらゆる人間が平等であるとして、手芸屋達や地域の地主達といった社会階層の政治的代表でもあった。⁶

ファーラービーの理想的社会ないし理想的国家の政治思想諸見解は、彼の社会と人類、社会の発展そして人類の生命の条件、国家とその体制、人格的あるいは無知的（悪德的）国家の独特性、公正で平等的な平和友好的諸関係、戦争と侵略等の一連の社会的諸見解に基づいて形成される。社会形成の起源を問題としよう。

二 社会形成の起源論

ファーラービーによると、社会は人類の社会的生命の条件と形態である。その起源と継続は、地理的環境に関わる。ファーラービーは、自らの社会と人類に関する思想諸見解を絶対的に取り分けず、むしろそれを自然の発展の持続と自然的な地理的条件に基づいて位置づけている。ファーラービーはこの点で、人類の生命を自然と地理的環境から取り分けてそれを神学的でないし神秘的奇妙として考える諸見解を拒否している。

ファーラービーは、社会が宗教的神学的な原因によって誕生し、形成されるといふ諸見解を批判する。彼は、社会形成の起源についての単なる生物学的思想諸見解もまた批判する。⁷ こうした思想は、人間社会が動物の群がりのように、単なる自分が属する種が存在し続けるために、他の種ないし地域と無慈悲的に、そして絶えずに闘争し続ける必要性と目的によって形成されるとみなすからである。こうした見解によると、人類社会は動物的世界を支配するために、自分の敵達に対して、永遠に憎しみ、嫌悪し、そして衝突し続けるべき、それを抹殺する目的を満たすために形成されるとみなされる。⁸ 彼らの考

えによると、「諸都市も互いに敵対し闘争すべきになる：あらゆる人間が単なる自分では持つていない富と財産を享受するためにだけ、それらを享受し利益を受け取っている他の種ないし他人と闘争すべきことになる。ただあらゆる角度から自らの敵を勝利することができる人だけが最も幸福な人になる」⁹⁾。ファラービーはこうした敵対と互いの憎しみの嫌悪関係を人間社会の本質とその形成起源と何の関係もないものとして拒否する。

ファラービーは、『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』第二十六章「諸人間の結合と相互協力の必要性」において、次のように語る。

「各人間は自らの本質に基づいて生きる、そして崇高な完璧に満たすために多くのものを必要とする。しかし彼らはこの必要なるものを単なる自らだけでは解決できない。彼がこれらを獲得するためにあらゆる需要を満たす諸人間の共同体に入る必要性が生じる。ここには、各人が他人に対しても全くそのような状態にある。それ故、ただ相互協力する大勢の諸人間の共同体によるだけで、各人は他人が生きるために必要なものを製造するためある程度の貢献を捧げる。それによって、人間は自らの本質によって目指される完備状態を獲得できる。この共同体におけるあらゆる成員は協力的な活動によって、自らの生命と完備を獲得するための必要なあらゆるものを獲得できる」¹⁰⁾。

ファラービーはここで、人間の社会形成の起源を社会の自らの内的諸原因によって説明しようとする。彼はこれを、人間の積極的社会的生命の諸要件、結合し協力しながら共同活動する必要性、他人の生命と完備を獲得のために有利な貢献をする、共同体として生きる、そして共同に発展する等の重要な要因によって議論する。特に注目し値するのは、ファラービーが、各人間の自らの生命の必要条件を他人の生命の必要条件に関係させる、したがって、物質的生命の条件を精神的完備の条件に密接に関係づけることである。哲学的根本問題において現代的な用語はまったく用いられない。それにもかかわらず彼は、生命の物質的条件（産業）、生命の社会的諸条件（社会化する）、そして、生命の精神的諸要請（完備に向かつて行く）という諸問題を終始焦点に置いている。

ファーラービーは、自らの思想の諸見解を進んで次のように語る。

「そして人類の世代は地球の住む、生活できるところで増えて行つた。その結果として人間社会が誕生した。ひとつは、完全社会である、もうひとつは、不完全社会であつた¹¹⁾。ファーラービーは、社会を「完全社会」と「不完全社会」という二つに分け、「完全社会」は大きな社会、中間（中型社会）、小さな社会という三つに分けて考える。「大きな社会」というのはこの地球におけるあらゆる人間の相互協力する共同体である。中間社会というのは推測されるあらゆる諸民族の社会を指す。小さな社会というのは、可能状態として考えられる全ての都市の市民を示す¹²⁾」。

ファーラービーは、「不完全社会」概念をも社会的協力の程度の広さという意味で用いる。彼の考えによると、町と田舎、村なども社会として考えられるにもかかわらず、それは自らの制限によつて「完全」とは考えられない。それは物質的ないし精神的に発展するために、他都市や国家、さらにはあらゆる人類の世界に繋がる交流を持つべきと考えられる。ファーラービーは次のように語る。

「不完全社会は田舎と鄙そして町村に住む住民から構成される。彼らは随意に好きな町の随意的な住宅に住み、社会の原始的、低い段階を構成する。町村と田舎ないし鄙の両方とも都市の保護に依存する。ここでの、田舎ないし鄙はともに都市の保護に依存する、というのは、それは都市のために機能する、ということであり、町村が都市に属して依存するように、その構成部分である。村は町の一部である、町は鄙の一部である、都市は地域の一部である、祖国と人民が地球上で生きているあらゆる全体としての社会の一部である¹³⁾」。

ファーラービーは、社会という概念を以上のように分析してから、社会的生命の基盤として、人類の、諸家族の、町の、諸都市の、そしてあらゆる人類の相互の敵対関係ではなく、むしろ、相互に協力すること、そして社会的統一性を多面的に強調する。これはファーラービーの根本哲学である。

ファーラービーの社会の本質と人間の社会的本質についての諸見解において注目し値するのは、彼の考えによると、各人

が自らの社会的自然ないし本質によって、社会の構成する一員として平等であることである。その社会として結集することの必要性、物質的ないし精神的諸需要、相互援助とあらゆる社会の統一性における様々な持ち場において各人は平等である。ファーラービーは、人間の社会的生命の諸需要を解決するための統治性（主人）と被統治性（奴隸的な服従）の原理を厳しく拒否する¹⁴。彼によると、人間社会の生成とそれを維持し続ける保存法則ないし自然的原理、そして、社会的原理は、相互平等的な協力及び統一性の原理である。ファーラービーは、統治性と被統治性の関係を人間の社会的本質に、すなわち、理性（智慧）と人文主義の精神に矛盾する現象であるとみなす。この点においてファーラービーは、アリストテレスの社会政治思想の諸見解と厳密に相違される¹⁵。

アリストテレスによると、社会の原初的表象は家庭（家族）であり、その構成員が支配人（統治者）と被支配人（被統治者）、主人と奴隸、男性と女性、父と子供に分類される。彼によると、社会は自らの原初状態から永続的に不平等性に満たされ、家庭から国家に到るまで町村田舎が一つの中間的部分である。奴隸制があらゆる社会の絶対的ないし不変的表象要件であるとみなされた。

ファーラービーとアリストテレスの社会政治思想の共通点は、彼らが「イデア観念論」と「理想的国家」についての諸見解に対して批判的立場を取ることである。相違するのは以下の点である。

アリストテレスは、道徳（人格）を富の一つの表象とみなし、手工業職人達や奴隸達を貧しく非人格的存在として考える。彼によると、貴族が人格に、財政集団が富に代表され、これらを結合させる「中間状態」の政治形態のみが彼の理想的国家である。アリストテレスは奴隸主階級の中間階級の代表として、卑劣的で暗黒な奴隸制によって中間階級奴隸主階級の条件づけられた幸福と福祉を考えた。これに対してファーラービーは、封建社会の都市手工業人、商人、農村における農民達、下級階級の土地主の利益の代表として、無知暗黒の封建社会にありながらも民衆人民の平等、幸福、そして社会全体の前に向けて絶えず進歩することを狙っている。ファーラービーによると、有徳都市は共同体の普遍的幸福に達成するために相互

協力、そして共同に発展と完備を獲得するために自覚的に努力する都市であり、その中に、人文主義、理性主義、社会福祉の進歩主義思想が輝いている。

ファラービーは、国家を社会の道具的手段として永続性を持つと理解するときに、それが歴史的現象であることと階級の本質を明らかにしない。それにもかかわらず、ファラービーは国家（都市統治）を人間の社会的本質と人類学的本質に適應するべきであると強調している。

注目に値するのは、ファラービーは、国家と社会の関係という当時における最も重要な事実的意義を持つ政治哲学の根本的問題を提起して、自らの人文主義的思想立場を明示することである。あらゆる社会全体が国家機関のために役に立つべきであるのか、あるいは、国家機関が社会全体のために役に立つべきであるのか、人民主義か独裁専制か、という問題は中世のみならず、むしろ、社会思想ないし国家論における哲学の根本問題である。この問題はファラービー以前においては取り上げられない。そして、統治階級にある無能な国家機関の利益のために人民が犠牲になる例は、現実の歴史において普通に見られることであった。

ファラービーによると、国家は人間の諸需要を社会的道によって解決することを目的として構成される組織である。彼は、国家の任務は物質的提供とないし精神的発展、そして、人間の幸福を社会的諸手段によって実現することを中心とするべきであるとみなす。彼の考えによると、政治哲学は単なる国家組織を、諸機関の構造と発展の諸段階を研究するに留まらず、むしろ、人類の社会的富、そして社会福祉を創造する道として研究されるべきである。¹⁶⁾ 彼によると、社会諸科学における倫理学は諸人間の間での善と悪の関係の諸基準を研究し、政治哲学は人間の社会的生命の諸方法、社会と国家の関係の諸基準、政治的機関としての国家の実践的活動によって住民の現実的幸福を獲得する社会的諸方法そして国家統治の諸要請等を研究する。¹⁷⁾

ファラービーが政治学を「国家の学」(ILMUL MEDENIYE)、「国家の政治」(SIYASATUL MEDENIYE)と名称する¹⁸⁾

とは、彼が都市 (MEDENYNE) と国家と社会を一体として考えていることを明示している。ファーラービーは国王 (支配者) 達のためにいかなる統治法典も書いていない。しかし、彼の『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』という名著は、都市の住民のために役に立つ、有徳社会を狙いとしている。

三 「有徳都市」と「無知都市」

ファーラービーの社会政治思想の中心的鍵は「有徳都市」と名付けられる理想的国家社会についての思想である。¹⁸彼の理想的国家思想が重要問題である。彼は、非常に幅広い諸問題を、理想的都市とは何であるのか、それがいかにして誕生するのか、その構成する諸部分とそれらの秩序、理想的都市の首領 (国王達) の具備すべき諸条件と特性、子供達と青年達を理想的首領にするためにいかにして教養するべきかなどを吟味する。したがって、その彼らを教育する環境と諸条件、理想的都市 (国家) である有徳都市と対比される無知の都市と無知首領 (国王) の種類、そして、人間を無知都市の悪徳習慣に導く諸原因、幸福と智慧 (芸術)、忠実と狡猾等の善と悪の諸徳なども問題である。本稿は普遍的問題を扱おう。

ファーラービーが「社会」ないし「国家」という名称ではなく、むしろ「都市」という名称を自らの理想的国家ないし社会についての思想を表現する用語として行使する際、彼が念頭に置いているのは、都市市民の生命を守るための、交通、貿易、文明、財産管理などの防衛拠点である。ファーラービーはこうした都市を「有徳都市」と「無知都市」に分ける。

ファーラービーは、「有徳都市」(EL MEDINE EL FEZILE) と「無知の都市」(EL MEDINE EL JEHILYNE) の両方を社会の生命の自然的特性の視点から共通点を持つとみなす。しかし、それらは、人生の目的、生命の特性と性質、社会的道徳と社会的幸福との諸関係などに根本的な違いを持っている。

ファーラービーによると、「有徳都市」と名付けられる理想的国家の人民は宗教的教義の基準によって制限されるのではな

く、むしろ、彼らの善的な積極性、そして「学的知識」が尊敬される。彼は、「有徳都市」の性格づけを提示して次のように語る。

「相互協力して、幸福を獲得することを目的として、共同体を作った人間の都市が有徳都市と考えられる。相互協力して、幸福を獲得することを目的とした諸人間の社会が有徳社会と考えられる。相互協力して、幸福を獲得することを目的とするあらゆる都市の住民が有徳住民と考えられる。もしあらゆる人民が幸福を目的として相互協力を展開すれば、地球全体で同様に有徳都市（国家）が成立する」¹⁹。

「無知の都市」とその住民の性格特徴については、次のように語られる。

「有徳都市の反対である都市が無知の都市である。それは非道徳的な都市、詐欺の都市、そして徘徊都市とみなされる。同様に、この都市に代表する住民も有徳都市の住民と違って、それに相反する。／無知の都市の住民は幸福を絶対に知らない、それらの支配者達はいつでもそれを獲得する目的をしない。彼らはそれを獲得したことが全くない、それを信じたことも全くない。彼らは非常に簡単な（浅い）物事を幸福とみなす。彼らの人生の目標は単なる身体的力の強さ、富を獲得すること、情欲、自らの趣味を意のままにすること、名声や地位である。あらゆる無知都市の住民の視野においては、こうしたものが幸福とみなされる」。

ファーラービーは、社会的生命の根本的条件は諸人間の共同体として団結し相互協力することであると明示する。したがって、これを社会的生命の存在することの、始原的、普遍的、自然的、必要条件あるいはしるしとして考える。彼によると、社会の精神的特質、つまり、諸人間がいかにして結集するのか（社会的関係ないし生産関係）、社会の政治的ないし道徳的体制、諸人間の間での相互援助の目的、彼らの幸福観、住民の教育教養と他の諸要素がその都市（国家）の有徳か無知かを決定すると考える。

ファーラービーは、無知都市について著作の二十九章において専ら議論を行う。それらの色々な種類を具体的に採り上げ

て、そして性格づける。これは彼が中世アッバス朝と暗黒な封建制度の社会的姿勢を暴露し批判する際にも実際に役立てられた。我々は彼の理想的国家を考察する前に、それを検討しよう。

ファラービーは、無知都市に対して六つの特徴づけをしている。

第一「必要性的都市 (MEDINE ZORUKIYE) である。特徴は、その住民が必要なものを欲望するだけに限られる。彼らの存在は身体的生命の必要性による。というのは、飲食、衣装、住宅等を獲得するために互いに関係し援助するからである。」ファラービーによると、この都市には精神的発展をするすものは何もない、物質的かつ自然的な需要性 (欠如性) の中でさ迷う人民の社会と国家である。

第二「詐欺都市である。その住民が富を獲得する、金持ちになることを狙って、あらゆる手段を行使することを人生の目的とする」⁽²²⁾。

第三「墮落と不幸都市 (MEDINUL HESEWEL SHIGUWE) である。この都市の住民は情欲を欲望する。食って、飲んではから性欲 (性交) を導く」⁽²³⁾。彼らは感覚と想像力に騙されて自らの時間を浪費する。

第四「榮譽都市 (MEDINE KARAME) である。その住民は互いに援助しあうが、彼らは偽りの名誉と偽りの尊厳で自らの感性と知性能力を失っている。彼らは称讃、盛名、名声、(他の人々の) 言動によって褒め讃えられ、賞揚されることが誇りであり、魅力的と考えている。」⁽²⁴⁾ 同書

第五「権力主義的都市 (MEDINUL TEGHILP) である。この都市の特徴は、住民は他人を服従 (征服) すること、そして自分達は誰にも服従しないことを望む。彼らの望みは征服によって獲得する快樂だけである。彼ら以外の人々を打ち負かし、また彼ら以外の人々が彼らを打ち負かすのを妨げることである」⁽²⁴⁾。これらが暴力派として考えられる。

第六、性欲恋愛 (エロチシズム的) 都市である。「この都市の住民の意図は自由であることである。彼らの一人一人は自らの欲するを行い、彼らの欲望を少しも抑制することがない」⁽²⁵⁾。これらの本質はただの我がままとされる。

ファアラビーは以上の六つの悪徳の典型的モデルによって中世無知暗黒社会と無知的性格を描く。この思想は現代の階級（階層）社会と色々な悪徳の人間の典型を認識するためにも意義がある。

ファアラビーは、無知都市の六つの悪徳の典型を、自らの模範的、有徳的、理想的都市に対立すると明示するとともに、また三種類の悪徳の都市を自らの批判の対象とする。それらは、非道徳的都市 (MEDINETUL FASIQE)、変容的都市 (MEDINUL MEDBETLE)、そして邪道都市 (MEDINUL SALE) である。この三つの都市は無知都市から区別される。

ファアラビーによると、非道徳的都市の住民は（理論的に）分かっても実行しない。彼らが有徳都市における能動的智慧のあらゆる分野における価値を見ても、つまりその崇高と有能性を分かっても、相変わらず、無知都市の住民と同様な行いをする。

「変容的都市とは彼らの見解と行為がかつては有徳都市の住民の見解と行為と同じであつたが、その後変化し、そのなかにかつての見解とは違つた見解が入り、彼らの行為は、かつての行為とは違つた行為に変わった」。

変容的都市は迷うかつ変容された都市であり、その住民の以前の見解と活動は有徳都市と同じであつた、にもかかわらず、後は継続できずに変容して、自らの影響力（勢力）を他人に受け取らせるだけを狙う。

「邪道都市はこれを指す。彼らの考えによると、幸福はこの世の後の世から来る。彼ら、今は神聖性と能動性についての従事を強調する。そして、派生的存在と能動的知性について、墮落した、不適切な考えを抱いている——たとえそれらが幸福の象徴、表象とみなされたとしても。その最初の支配者は、実際にはそうではないのに、自分は啓示を受けたと偽つた者達の一人である。この偽りの主張において彼は策略、欺瞞を利用する」。

ここにはファアラビーによる幸福の彼岸主義批判が読みとれる。また彼は、これらを不変的ないし独断論的なものとして考えない。彼の考えによると、有徳都市が破壊され、影響を受けることによって、変容都市に変化される、あるいは、また立ち戻つて有徳都市になる可能性がある。また、有徳の首領（国王、指導者）達の指導によって有徳都市に変わる可能性

もあると示す。例えば、「榮譽都市」にとつてそういう可能性はそれほど難しいことではない⁽⁸⁾。なぜなら、ファラービー自身によると、あらゆる地球において一貫した幸福な、有徳的な生活することもまた榮譽あることだからである。人間は幸福になれる、あらゆる民族は共に協力することによつて、地球全体における幸福な生命を作ることにも可能になると考えられている。

四 「有徳都市」の普遍的原理

ファラービーは、「無知都市」の批判的考察によつて、自らの理想的模範社会思想を展開する。「有徳都市」の普遍的諸原則と起源についてのファラービーの諸見解は、次のように考えられる。

「有徳都市」の第一の根源的原則は、智慧が中心の指導権を持ち、真理、道徳、そして文明が優先されるべき、である。ファラービーは、生命のために最初は生命の物質的諸条件と富のために結集して戦うことを、そして、人間関係における協力をあらゆる人間社会の共通的特徴として考える。「有徳都市」と他の社会との区別は、彼らは飲食、洋服、住宅などの日常生活に必要なものための戦いを人生の目的と幸福の基準とする一方面的偏見によつて制限されないことである。「有徳都市」は有徳的な社会的必然性によつて優先される。無知の社会における人間の結集と応援と協力が自然的必要性によつて利益や榮譽といった原因で発生するとすれば、有徳社会においてこれらの諸関係は相互の尊敬、相互の尊厳、相互の友愛のために派生すると考える。

ファラービーが相互の友愛を智慧の、そして真理（法則）への認識の表象として「理想的都市」の社会関係の基準とみなす際には、自らの一貫した汎神論的哲学に基づいている。彼の考えによると、「有徳都市」は「智慧の王国」であり、そこには、智慧が支配するべきである。彼の「都市の首領」についての見解もこれに基づく。ファラービーは人格（道徳）と

真理を血液と筋肉のように関係づける。そして、真理による幸福獲得の可能性を自らの社会思想の基盤とする。彼は「真理がすべての存在の神聖な目的であり、さらに、幸福と人格（道徳）が真理の目的である、それ故に、これらを切り離すのは不可能である」と明記する。

ファーラービーは、科学と住民の自己教養を真理と智慧の獲得の根本的手段として考え、身体的、精神的健康を、真理に対する愛を、崇高な性格を持つことを求める。「汝自身を知れ」は古代ギリシアの箴言であり、ファーラービーはこれを人類の精神的発展の根本原則とする。彼の「汝自身を知れ」についての見解も宗教ではなく哲学を意味している。ファーラービーは、無知、墮落、非文明性に反して自らの有徳のないし文明的で模範社会を、智慧が支配する、真理を通して、相互の友愛によって、幸福のために戦う輝かしい社会を描く。

「有徳都市」の第二の根源的原則は、自由と正義である。ファーラービーは必然性と自由を両立するものとして考える。彼にとつて、智慧を持つ人間だけが自由を享受できる。あらゆる道徳（善）は選択の自由によって獲得可能である。有徳都市において、崇高な道徳的人格は自らの自由選択によって獲得可能である。したがって、善と悪は自由選択によって獲得できる。そして、「善悪は意志による、善行と悪行をするのは人間に属する」と言われる。

ファーラービーは次のように考える。有徳都市の住民は真理を愛する、智慧によって必然性を認識し、必然性についての確実的知識によつて、智慧を成長させて、人類の物質的、精神的共同な幸福を獲得する文明的人民である。そしてこの住民は正義を愛する、人間の諸関係と諸利益を道徳の視点から自由に思考し、自由に行爲する。

「有徳都市」の第三の原則は、あらゆる人民の平等性、弾圧と独裁性が存在しないことである。ファーラービーは、世界史において初めてあらゆる人民の社会という思想を提起し、初めて国際社会の思想を提起した。プラトンとアリストテレスは奴隸制を、奴隸の抑圧を、そして異民族を奴隸にすることを支持し、ギリシア優良人種思想見解を強調する。

ファーラービーによれば、有徳社会住民の利益と活動は一致する、国家の目的が少数の人達の幸福のためではなく、むしろ

ろ、あらゆる人間全体の幸福のために役に立つ、あらゆる世界全体のすべての人類のために勤めるべきである。³⁶⁾

ファーラービーは、無知の都市とそこでのすべての無知、貪婪、暴力性、色々な偽りを社会的不平等の結果として非難し、彼の社会的平等思想は、人間の自然（本性）の原則によって、あらゆる階層思想の諸見解と対立する。彼は「封建的独裁を非難する」³⁶⁾。彼によると、理想的社会の首領達（REIS EL MEDINE EL FEZLE）は無条件的（独裁）ではなく、条件づけられていいる。つまり、彼らは天子達の中から、宮廷の継承者として統治者（首領）になるのではなく、住民の中から特定した条件によって選ばれる。

ファーラービーは諸民族の協力の保護者である。彼によれば、あらゆる民族は身体的、智慧的に、そして創造する能力的において平等である。彼自身の教師達、友人達、生きる時代、彼の知識の諸起源、そして豊富な言語的力は多民族的である。彼は有徳的社会において、あらゆる民族の平等を、そして有徳社会がますます少しずつ拡大して、地球のあらゆる民族の生命様式にまで普遍化することを望む。³⁷⁾ ファーラービーの有徳社会についての教説は、その当時までの先行の理想国家思想と相違する。その特徴は、あらゆる人民全体、そしてあらゆる諸民族の平等性である。

結

ファーラービーの幸福主義的、有徳的理想的社会と理想的国家についての思想は、無知の中世封建制の圧迫と独裁国王の時代において幻想的な教説であった。哲人国王（首領）や人民の団結と協力によるだけでは、こうした理想的社会を創造する可能性についての信頼と希望は幻想に終わる。彼は他の諸手段によってこうした理想的社会を創造することを望まない。彼の考えによると、きちんとした一人の善い賢明首領が都市を創造するためには、最初、権力主義的都市（MEDNULELTEGHIP）から共同体の都市（MEDINE JAMIYE）に変化させて、それに無政府主義の状態そして無秩序に反する法律を執行し、それ

から「有徳都市」に転回しなければならぬ⁽³⁸⁾。そして、模範的な有徳都市が地球上のあらゆる地域に創造されることで、地球はすべての諸民族の友好的家族として作り直される⁽³⁹⁾。

フアーラービー自身は、たとえばプラトンのように逃走罪を受け自らの計画をシチリアの首領に提案して逮捕されるようなことをしない。そしてまた、ヨーロッパの社会主義者達がかつて実験したように地域を開発する、あるいは首領達からの援助を求める等の活動をしなかった。彼は『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』という名著を生涯の最後の晩年に完成する。

フアーラービーは哲学者として、当時の支配する政治イデオロギーの運命論、独裁論的、非平等性論についての伝統的教義に反して、人間の自律によって、科学に依存して幸福的に生きる可能性を、そして彼の最善の統治形態としての理想的社会の獲得する可能性を強調した。彼のこうした思想は人文主義的、理性主義的、発展的な諸見解の具体的表象として貴重な貢献である。フアーラービーは人類が輝かしい未来を獲得すると信じ、最後には地球全体が善（幸福）に導かれることを疑わない哲学者であった。

註

- (1) アブドウシユクル・マホメット・イミン著、『フアーラービー及び彼の哲学体系』、新疆人民出版社、二〇〇四年三月、三二二頁。ラインハルト・マオラー著、『プラトンの政治哲学』、風行社、二〇〇五年八月、参照。
- (2) 岩田靖夫著、『アリストテレスの政治思想』、岩波書店、二〇一〇年八月、一〇九頁、参照。
- (3) アリストテレスの「異国人」は移民、無知人、教育を受けていない者等を指す。
- (4) S・F・ケチェキヤナ『政治思想史』一九六二年、七十〜七二頁参照。
- (5) 紀元前五世紀のアテナイの有名な民主活動家達であるテムストキル、パレクリス等ではなく、中間階層の有限財産集団の主張者

- 達であるニキヤ、テイラメニス等を支持する。彼がコロン集団学派の保護者である。
- (6) ファーラービーは、「プラトンと同様に当時において存在している国家政治形態を批判する。したがって、自らの「人格的国家」についての理想的国家論を描く。特に、アリストテレスのようにはあらゆる個人的功利的の目的のために、統治を利用する国家を拒否する。換言すれば、民主的統治形態と智慧の結合と協力によって、自らの美しい本質を堅固化するために役に立つ法律を強調する」。A・O・サデイコフ、「ファーラービー研究論文集」、『ファーラービーまでの政治思想』九三頁。
- (7) 『ファーラービーの時代と教説』三〇二頁参照。
- (8) 同上書三〇三頁参照。
- (9) ファーラービー『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』第三十四章『無知ないし徘徊都市の住民がもつ見解の諸原理』、S・N・ギリゴリヤン『中央アジア及びイラン哲学史』一七八、一八五頁ロシア語の邦訳参照。
- (10) ファーラービー『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』第三十四章『無知ないし徘徊都市の住民がもつ見解の諸原理』、S・N・ギリゴリヤン『中央アジア及びイラン哲学史』一五六、一五七頁ロシア語の邦訳参照。
- (11) ファーラービー『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』第二十六章参照。
- (12) 同書参照。
- (13) 同書、一五七頁参照。
- (14) 『ファーラービーの時代と教説』三〇二頁参照。S・N・ギリゴリヤン『中央アジア及びイラン哲学史』六十七頁ロシア語の邦訳参照。
- (15) 『タジック哲学史』七十六、七十七頁参照。
- (16) S・N・ギリゴリヤン『中央アジア及びイラン哲学史』六十六頁参照。
- (17) 『ファーラービーの時代及び教説』三〇一頁参照。
- (18) 『ファーラービーの考えによると…模範的都市は人間の身体(有機体)なように明らかに智慧的(知識性も含まれる)な体制を持つ有機体である。彼はこの点において、プラトンの『国家』とアリストテレスの『政治学』の影響を受けたのは明確である。…彼の理想的都市では、社会の目的は自らの住民の幸福であるとされる。ちなみに、国王達が道徳と能力的に完備の程度で達成す

- ることが強調される」フィリップ・ヒッティ『アラビア通史』、四三六頁参照。
- (19) S・N・ギリゴリヤン『中央アジア及びイラン哲学史』六十六頁参照。
- (20) ファーラービー『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』第二十六章、S・N・ギリゴリヤン編製のロシア語版邦訳参照。ヨハンナ・カマル編制、『ファーラービー』、リバン ベイルット、一九六八年、アラビア語版。
- (21) ファーラービー『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』一六七頁参照。
- (22) 同書、一六七頁参照。
- (23) 同書。ファーラービー、『哲学書』、三二四から三二五頁、(ヨハンナ・カマルの本の四三頁参照)。
- (24) 同書。ファーラービー、『哲学書』、三二四から三二五頁、(ヨハンナ・カマルの本の四三頁参照)。
- (25) 同書。
- (26) 竹下政孝編訳、『中世思想原典集成XI』、上智大学中世思想研究所、平凡社、二〇〇〇年十二月、ファーラービー、『有徳都市の住民がもつ見解の諸原理』、一三二〜一三三頁参照。
- (27) 同書、一三三〜一三四頁参照。
- (28) 『文化史におけるファーラービー』一四九頁。
- (29) ファーラービー、『社会と道徳』、二七二〜二七三頁参照。
- (30) 「ファーラービーは、哲学と宗教の関係を吟味する際に、これらの内容が一致するにも拘らず、宗教が知識の単なる形象の一種である、哲学は知識の最高の形態であつて、知性的ないし智慧的な概念と考える。ここで彼は、宗教の理論的基盤に対して批判的立場を取る」『文化史におけるファーラービー』一五一頁。
- (31) S・N・ギリゴリヤン『中央アジア及びイラン哲学史』六七頁参照。
- (32) ファーラービー、『哲学書』、三〇五頁。
- (33) ファーラービー、『社会と道徳』、三〇五頁参照。
- (34) I・S・ピラギニスキ、『タジック文明研究』、モスクワ、一九七七年、二七二〜二七三頁参照。
- (35) 同書、二七二〜二七三頁参照。

- (36) S・N・ギリゴリヤン『中央アジア及びイラン哲学史』六八頁参照。
- (37) 「ファーラービーの幻想教説思想は、不朽な国際的意義を持つ」、同書、二七四頁参照。
- (38) 『ファーラービーの時代及び教説』三一四頁参照。
- (39) 同書、三〇六頁参照。

(本学大学院博士後期課程・哲学)